

ピアノ基礎技法 ～ ペダルの使い方 ～

The Basic Piano Techniques : Pedaling

(2005年3月31日受理)

大 山 佐知子

Sachiko Oyama

Key words : ペダルの種類, 静かに踏むペダル, 音とペダルのタイミング

It is to be desired that a child begins to be used to pedaling as soon as his feet reach the pedals, because the pedaling keeps the sound longer and changes the nature of the sound. The pianist must change the finger touch in accordance with the pedals, if he wants to have the sound he imagines. At last, it is ideal to be used to pedaling without being aware of it.

ペダルは、足がペダルに足りるようになったら、早いうちに経験を積み重ねる方が望ましい。なぜなら、ペダルを使用することにより、音が長く保持されて響きが変化してしまうからである。イメージに合う響きを作るのに、ペダルを使う時と使わないときでは、指のタッチを微妙に変えなければなくなる。最終的に、ペダルは、必要なだけ無意識に使用するのが理想である。

はじめに

ピアノのペダルは、以外に工夫されずに踏まれていることが多い。ソナチネアルバム位に進んでも、ペダルだけは、一曲の中で使用する頻度も少なく、経験年数が浅くなるからかもしれない。せっかく踏んでいるのに、ピアノをより効果的に演奏し易くなるはずが、濁音になったままであることもしばしばである。そのようなにならないためにも、注意深く“踏む”意識が必要である。そして、演奏している意識とペダルが一体化するためにも、技術習得のなるべく早い時期からペダルの経験をすることを薦めたい。

ここでは、ペダルへの足の準備の仕方から踏み方、ペダルの種類、ペダルのタイミングについて初級の段階から身につけたいことを中心に、考察していく。

<ペダルの種類>

ペダルの種類は、グランドピアノでも、アップライト

ピアノでも3種類付けられている。しかしどちらでも、2種類しか付けられていないこともある。

3種類のペダルがついている場合から説明しよう。

グランドピアノで、ペダルが3本の場合、次のようなペダルの種類になっている。

右ペダルは、名称を“ダンパーペダル”と言う。

左ペダルは、名称を“ソフトペダル”と言う。

中央ペダルは、名称を“ソステヌートペダル”と言う。

それぞれ、次のような目的で使われる。右ペダル=ダンパーペダルは、その名のとおり、踏むと、ピアノの弦の上に接しているダンパーを持ち上げることで、弦の振動を妨げず、音を長く響かせる役目をする。

左ペダル=ソフトペダルは、弱音ペダルである。弦の下から弦を打つハンマーの位置を、数ミリ右へずらし、ハンマーが弦に接する面を少なく変えて、物理的に弱音にする。

中央ペダル=ソステヌートペダルは、一回の打鍵の音で使った音のダンパーだけを持ち上げたまま、音を残す。

それ以外のダンパーを持ち上げないという特殊な使い方をする。例えば、低音を残し、指はもちろんその音から離れても音は、持続されていて、その上にどんな音を重ねても濁らせない必要がある時、このペダルを使う。尚、この後から加えた音に、新たに、右のダンパーペダルを付ける可能性はあるので、ソステヌートペダルは、左足で踏む。

次に、アップライトピアノについて述べる。

アップライトピアノで、ペダルが3本の場合、また違うペダルになる。

右ペダルは、“ダンパーペダル”。

左ペダルは、“ソフトペダル”。

中央ペダルは、“防音ペダル”。

アップライトピアノの中央ペダルは、特殊なペダルである。なぜなら、アップライトピアノは、本来、家庭の中での演奏楽器であり、コンサートホールでの演奏を目的として作られていない。そのため、防音室を作る代わりに音をできるだけ消音しなければ、練習ができない場合にのみ使用する、特殊なペダルを付けている。もちろん、演奏のために、この中央ペダルを使用することはないのである。

では次に、2種類のペダルがついている場合の説明をしよう。

2種類の、ペダルしかない、アップライトピアノや、グランドピアノは、ダンパーペダルとソフトペダルをつけているのが普通である。

演奏される中で、一番使われるのが、ダンパーペダルである。ペダルの使用法は、9割がこのペダルの使用法を身につけることで、終わると考えてよい。ソフトペダルも使えると、より表現の幅が広がるが、これを使用するような曲は、上級にならなければ経験しないかもしれない。ソステヌートペダルになるともっと出番が少なく、使用する曲が限られてくるので、演奏の目的意識がよほどはっきりなければ、使用できないものである。

〈ペダルに乗せる足の置き方〉

ペダルの種類がわかったところで、ペダルに乗せる足の置き方を考えたい。

足の構えの位置から述べることにしよう。両足は、ペダルの幅（2本ペダルならその幅、3本ペダルなら両脇

の幅）に踵が位置して、自分から見ると逆“ハ”の字のように構えられているはずである。ペダルをまったく使わないとわかっている曲以外は、通常、右ペダルに右足を乗せている状態で、ピアノ向かって座っている。

左足は、足先が左ペダルにすぐ届く位置で、しっかり床を踏みしめているようにする。ソフトペダルは、一曲の中で数回位しか使用しないことが多いので、常に足先をかけておく必要はない。また、そうすると、いつも、両踵しか床に接していないことになり不安定な感じになる。左足は、使用する以外のときは、床に足先を下ろしておくことが大切である。

左右の足先の位置は、つまり、逆“ハ”の字で右足が前に出て右足先がペダルにかかっている状態で構えるということになる。

では、もっと細かい注意点を述べる。

右足のペダルへの置き方であるが、どのような接点を持てばよいのだろうか？

足の1指（親指）、2指（人差し指）、3指（中指）までがペダルに乗せられているくらいで充分であると考え。他の4指5指は、添えられている感じである。また、指先だけではペダルは重いので、足の指の付け根までが乗せられている方が、ペダルを楽に踏むことができる。これが基本の構えと考える。

ペダルが重いなら、足の裏の真ん中くらいまで、足を乗せた方がペダルを軽く感じるのではと思われるかもしれない。しかし、土踏まずに近いほど足先を動かす感覚は離れ、動きが鈍くなる。そのため、細かいペダルは、踏めない状態になるので、不都合である。

細かいペダルが必要なら、足の指だけでした方が良いのではと、また思われるかもしれないが、これもあまり長時間行くと、足の筋を痛めかねないほど意外とペダルは重い（ダンパーペダルは、88鍵盤のダンパーを一度に持ち上げる役目をしている）ので、随分負担になる。

以上のような考えからまとめると、ペダルの重さに耐えられ、更に長時間の使用にも耐えられ、また、細かいペダルの使用を感じ取れる構えは、先に述べたように、“足の指先と、付け根を少し乗せる状態で構える”のが一番望ましいと考えるのである。

左ペダルも、使用するときは、右ペダルと同じように構えると良い。

〈ペダルの踏み方〉

足をペダルに乗せて、いよいよペダルを踏む場合どのような注意が必要であろうか？

結論から述べると、“静かに踏むこと”が大切である。音楽を演奏しているのだから、踏んでいる音は、できるだけ静かな方がよい。いつ踏んだかわからないくらい静かに踏むことを心掛ける。

では、どのように踏めば静かに踏むことができるだろう。

これは、ペダルの構造を理解することが必要になる。右ペダル＝ダンパーペダルは、前述のように、踏むとピアノの弦の上に接しているダンパーを持ち上げ、音を長く響かせる役目をする。

ダンパーを持ち上げるといことは、足を踏むのをやめると、また弦の上に降りてきて弦の振動を止める役目もあるわけである。

この、ダンパーの上下運動の際、一番出やすい雑音は、ペダルを踏むのを止めたときの、“カタン”という音である。これは、ダンパーが弦に衝撃的に降りてきた音である。どんなに瞬時に響きを切る時でも、雑音は、最小限であるべきである。音が鳴るのは、いつダンパーが弦に接するかが意識されないまま、単にペダルを踏むのを止めたためダンパーがほぼ自然落下してしまった結果である。

では、静かに踏むコツは、いったいどうしたらよいのであろう。これは、ペダルの部分だけを更に細かく理解する必要がある。ここで、これから述べることは、グランドピアノで是非試してもらいたいことである。ピアノの構造が違うため、アップライトピアノのペダルの重さは、段階を感じにくくなっているためである。

それは、ペダルの深さに含まれる“遊びの部分”を知っておくことである。車のアクセルに、“遊びの部分”があるように、実は、ピアノのペダルにも“遊びの部分”(＝まだ機能が効かないのに動く部分)が含まれているのである。

“遊びの部分”は、ペダルの深さの上下に作られているもので、これがないペダルは、欠陥ペダルと言える。

では、なぜ、“遊びの部分”が必要なのだろうか。

実は、この部分のおかげで、“静かにペダルを踏むこと”ができるのである。

“静かに踏む”ための確認の仕方を、述べよう。

まず、右ペダルに足を置き、最小限のペダルを動かす力で、ペダルを踏み込むと、少し踏んだところ(約5ミリ)で、急に重く感じる所があるのがわかるはずである。この部分からが、いよいよダンパーを持ち上げるための踏み込みなのである。そのため、物理的にはっきり重さを感じるようになる。

更に踏み込んで、ダンパーが弦から完全に離れたところで、一応全部の鍵盤が開放弦になったことになる。これで、充分なようであるが、ペダルをもう少し深く踏み込み、ダンパーを更に上に持ち上げることができる。

この上下の、効果としては、何もなければいけない“遊びの部分”は、何をするためのものか。

先ほどから述べているように、この部分に到達したことが判断できたら、足先の動きを止めることが確実にできれば、ペダルを“静かに踏む”ことが、可能になるのである。

想像していただきたい。足をペダルが上下動く範囲のぎりぎりまで動かさなければ、保持音や、消音をできないとすると、ペダルを底まで踏み込んだ時の鈍い音や、上まで上げたときのダンパーの自然落下の音は、早い速度では、静かに踏みかえることは、不可能といえる。踏み替えを速くするほどに、上下に激突する音が、耳障りになるに違いない。時々ペダルをカタカタ鳴らさないで踏めないようになっている人がいるが、むしろ几帳面上から下まで踏みすぎている人である。しかも、そのような人ほど、更に、ペダルを上まで上げたあと、足先の勢いが余って、ペダルより上に足先が浮いて離れている場合が多いのである。こうなると、再びペダルに足を置くための音も追加され、耳障りな雑音が倍増する。

上まで上げなくても、音を切ることができ、下まで踏み込まなくても開放弦になることがわかれば、ペダルの踏み方は、深さの真ん中の部分を上下する動きで良いことに気が付くのである。

ペダルを踏んで、音の響きを多く残す場合も、下の“遊びの部分”までふんわりと入って足先を止め、音を切る場合は、上の“遊びの部分”に、またスッと入った位置で止めれば、“静かに踏む”ペダルは、上手にできるはずなのである。

左のソフトペダルも同じように、鍵盤を動かす重さを

感じることができるし、最初に遊びが少し含まれる。

中央のソステヌートペダルは、ダンパーの状態を維持する役割で切り替えを行うだけなので、物理的な、重さの段階の変化は、感じにくい。これは、底まできちんと踏む意識がなければ、かえて切り替えができず、保持音をすることができないことがある。あまり、速い曲では、使いきれない。なぜなら、深く踏めば上下運動の時間がかかるので、早い切り替えには、対応できなくなるのである。そういうことで、使われる曲に限られやすい。

〈音とペダルのタイミング〉

ペダルを踏むことが、“静かに”行われるようになったら、音に対していったいいつ踏み込んだら良いのかが、意識できなければならない。

ペダルを踏むタイミングには、大きく分けて3種類がある。

“あとふみ”“前ふみ”“同時ふみ”の3種類である。

では、3本のペダルを全部このように踏むかというところ踏んでも意味のない踏み方がある。それぞれ、使える踏み方を整理しておく。

右ペダル＝ダンパーペダルの場合、この3種類を工夫して使うことができる。一曲のどの部分でどのような使い方をするかは、大きくイメージを変化させる鍵となる。

左ペダル＝ソフトペダルの場合、“前ふみ”しかあり得ない。機械的に、鍵盤とハンマーを動かすので動いた後でないと、音が変わらないからである。

中央ペダル＝ソステヌートペダルの場合、前に踏んで待っていても、踏んだ直後から音には関与しないので、まったく用を成さない。“あとふみ”または、“同時ふみ”なら、効果を発揮することになる。

3本のペダルのそれぞれの踏み方は、理解できたことと思う。

実は、忘れてはいけないのが、ペダルの止め方である。ペダルをいつ止めてあげるかも、意識しなければいけない。

一応これも3種類考えられる。“あとあげ”“前あげ”“同時あげ”である。

右ペダル＝ダンパーペダルの場合、“前あげ”は、不可能である。音の響きの最後だけ突然切れることは、

よほどの特殊な効果を狙う以外、考えられない。よって、“あとあげ”“同時あげ”を意識して行うことになる。

左ペダル＝ソフトペダルの場合、“前あげ”のみ可能である。“前ふみ”の理由と同じく、機会的に鍵盤とハンマーの位置が、元の位置にもどらないと音が弱音のままになってしまうからである。

中央ペダル＝ソステヌートペダルの場合、“あとあげ”しかできない。とくに鍵盤は、打鍵された後、指から離れていて、指は、他の部分を弾いているのに、音だけは、ペダルの効果で残っているだけなので、これしかあり得ない。

〈タイミングの選び方〉

3種類のタイミングで、ペダルを踏む必要があることがわかったところで、もう一歩進んで考えたい。その3種類の踏み方のどれを選ぶかは、同じ曲でも、その人の音楽のイメージの作り方でさまざまである。しかし、どのような効果を狙うための踏み方かは、ある程度決まるので、音のイメージに合わせて、踏み方を選ぶ目安になると考える。

まず、“あとふみ”について、述べよう。

ペダルが、上手に踏まれているかどうかは、まず、音を濁らせないで踏めるかどうかの問題である。これが、最初の注意点である。これが一番わかるのが、“あとふみ”である。すべての踏み方の中で、一番多く選んで踏むのも、“あとふみ”である。初めにこれを確実に習得することが、大切である。

“あとふみ”は、どのような場合に、使うのだろうか。

主に、伴奏の和音を持続するために、使われることが多い。ピアノは、一人で二役、つまり、メロディーを右手で奏でながら左手で伴奏も行う楽器である。左手だけの伴奏では、初めの伴奏和音の基盤になる低音の音から手の指が完全に離れないと次の音を弾けないという例が、多く出てくる。この場合、必ずペダルの“あとふみ”を使うことになる。低音の和音、または、一音に対して「音が出た後ペダルを踏むタイミング」の“あとふみ”をし、次に、和音が変わるまでをペダルでつなぐのである。

この、左の低音を“あとふみ”でペダルに入れ始める

とき、“あとふみ”が、低音に対して、同じタイミングで入るように、気をつけるのであるが、これが守れても何箇所かペダルが濁る場合がある。

どうしてだろう。

実は、濁りの原因は、低音の音ばかりとは、限らず、高音のメロディーのペダル切り替え部分の入り方のせいで起こることもあるのである。この場合は、特別に、“あとふみ”を更に微妙に遅くずらさなくてははいけない。

低音は、聞いていても、高音は、関係なく自由に弾いているとそのようなことが起こるので濁った時、ペダルのタイミングをずらす必要がある場所だと認識することが、必要である。この場合は、濁りの原因を作っている高音の音が、次の音に変わったことを耳で確認した後、即座にペダルを踏みなおすことになる。他の“あとふみ”のペダルよりは、やや遅めに入る“あとふみ”の場所になる。

“あとふみ”ができたなら、“あとあげ”をどこでするか問題になる。和音に合わせて踏むのであるが、メロディーの経過音が多すぎると、同じ和音でも早く濁る場合もあり、踏み替えをしたほうが良い場合もある。

また、“あとあげ”は、次の“あとふみ”に入る直前で行うのが、一番規則正しく“あとふみ”を成功させるが、先ほどから述べているように、濁りができた場合“あとあげ”が早くなり、足先を動かす感覚が不規則になり、その結果限りなく“同時ふみ”に近くなり、濁るといことも多々ある。

繰り返し述べるが、“あとふみを”すべき場所で、“同時ふみ”をすると、必ず踏んだ場所の前の音を入れることになり、前の音が、新しいペダル部分の和音に含まれる音なら、重音になるだけで済むが、和音に含まれない音だとはっきり濁りとして残り、雑音として聞こえることになるのである。

ここで、ペダルをスムーズにするために思い出さなければいけないことがある。それは、ピアノのレガート奏法のことである。

ピアノのレガートは、次の音に移るとき前の音を持続したまま打鍵し、一瞬音を重ねた後前の音を離すという奏法が正しい。「一瞬音を重ねる」必要がピアノのレガート奏法にあるのである。メロディーだけ取ってみると次の音にレガートで入るときは、このように一瞬前の音が

残っていただなければならないことになる。それが正しいのである。

そういうことで、このメロディーの瞬間の重なり長さにより、ペダルの“あとふみ”の成功、失敗も影響されるのである。このレガートのための音の重なりを避けて、前の音が消え、次の音になった途端“あとふみ”を行くと、完全に、濁らない響きを守ることができるのである。

更にこのとき、注意すべきは、高音の重なりが取れた時にペダルを踏んだものの、一番大切な低音からすでに左手が離れていて、ペダルに入らなかったということにならないよう気をつけることなのである。ペダルに確実に入れなければならない最初の低音の音は、高音のメロディーの重なりがなくなり、その直後ペダルを踏むことができた瞬間まで、意識して長めに、持っておかなければならない。これで、メロディーの変化も考慮した“遅めのあとふみ”が、確実に成功するのである。

和声的な響きを豊かにする場合、分散和音をまとめて響かせる場合、“あとふみ”は、とても有効なのである。

ただ、「音の出した後ペダルを上げる」「あとあげ」の位置によって、次に、ペダルを踏む場所まで、時間が空くと“あとふみ”のタイミングを待ちきれず“同時ふみ”になり易くなるので、いつも「音が出た後ペダルを踏む」「あとふみ」のタイミングを揃えるよう心掛けることが大切である。

次に“同時ふみ”について、述べよう。

“同時ふみ”を使う場所は、比較的わかりやすい。なぜなら、前述したようにやたらに使うと音が濁りやすいので、絶対に濁らないとわかっているところでしか使えないからである。

つまり、「休符」「スタカート」「フレーズの切れ目」などで、“同時ふみ”のペダルの前の音がない場合でないと、使えないということなのである。

“同時ふみ”は、アクセント的に短い音に、毎回つけることも有効で、ピアノの鋭い切れ味を少し和らげ、弦の切り方のような雰囲気を出すことができる。これは、一音に対して、“同時ふみ”を行い“あとあげ”をする結果、余韻がついて、弦の柔らかさを表現できることになるのである。もちろん、この“あとあげ”も限りなく

“同時あげ”に近くペダルをあげることもできる。その場合は、金管楽器のような、直線的な、切れ味の良い切り方になるであろう。

メロディーがスタカートであったり、低音が、オクターブで毎回切った方がよい場所などは、曲の中でも限られているので、比較的場所を決定しやすいのが、“同時ふみ”のペダルであると言える。

“前ふみ”について、述べる。

これこそ、特殊な踏み方になる。“前ふみ”が有効な場所は、“前ふみ”をする間、音がないことが条件である。つまり、曲の最初が強い音で、しっかり響かせることが必要な場合、または、曲の変わり目で、前ふみの条件が整い、やはり、全開放弦の響きを必要とする場合である。

全開放弦でペダルを底まで踏み込んだ状態で、強音を打鍵すると、最大限の響きを引き出す事ができる。これは、“あとふみ”と比べると良くわかる。

物理的に、ピアノの音は、打鍵の後減衰する構造になっている。一度出た音をまったく修正することができない楽器である。特に大きくすることができないのが、特徴であり、欠点でもある。

つまり、打鍵された瞬間の音が最大限の音なのである。これを、余すところなく、失敗なく響かせるには、ダンパーを最も高い位置まで上げて開放弦にしておいた状態で、その音を鳴らすのが、共鳴も含めて、最も理想的な、失敗のない“前ふみ”ペダルの用意なのである。

〈足の感覚〉

音とペダルのタイミングは、上記の考え方で整っているものと考えられる。

ここで、もうひとつ、「ペダルを踏む速度」のことを述べておきたい。

“あとふみ”の場合、一番心がけたいのが、ゆっくり踏むことができるかどうかである。これができることにより、ペダルの響きが自然に増す感じができるのである。

“同時ふみ”の場合は、比較的速く踏むことが必要である。指が鍵盤を押さえるタッチの速さと同じにペダルを効かせるわけなので、遅いと“あとふみ”になってしまうからである。

“前ふみ”は、何も音がないところなので、落ち着いて静かに底まで踏み込める速さでよい。

ペダルの止め方も踏み方と同じように意識して速度を考えることが望ましい。

“あとあげ”が一番ゆっくりあげる時間を要する。このあげ方で、音楽の雰囲気が決まることもしばしばある。そういう意識でイメージに合う響きの減らし方を考え、ペダルを最終的にあげる場所を、決定する。

“同時あげ”は、鋭い切り方なので、もちろん最高速度で、ペダルを止める。しかし、ペダルが上に上がったとき、「カタン」とダンパーの音がしないように、ダンパーが弦に接した位置で、ペダルの足先の位置を止める意識が必要である。

“前あげ”は、「音が切れていないのにペダルを上げる」ことであるが、普通は、ありえない。しかし、特殊な例として、最低音の保持のための奏法を紹介しておく。

“あとふみ”で保持された最低音を余韻を残しながら、高音メロディー部分が、変化するので、ペダルを何度か踏みかえる必要がある場合でも、最速で、ペダルを踏みかえると、最低音は少し残り、高音は残らず、濁らないで済む場合がある。これが、特殊であるが、“前あげ”の例と言えよう。

おわりに

ここでは、ペダルの踏み方を、少なくとも初級から中級の段階ですでに注意してもらいたいことを中心に、述べてきた。ペダルの使い方は、更に実際の演奏に役立てるためには、さまざまの考慮する点がある。それについては、又、次回述べたいと考えている。

ここで述べた細かな注意は、本来耳で確認すれば済むことなのだが、意外とできていない。耳で聞いたうえで確認は、個人差がある上に、好みも働く。気分によっても響かせ方が変わってしまう。不安定極まりない。

しかも、ペダルの操作は、実は、1秒以内の中の判断力を要し、よほど注意深くしなければいつも確実にペダルを使えるかどうかは、なかなか身に付かないものなのである。また、演奏の機会があるごとに、実際に演奏するピアノが、すべて違う個々の楽器であるので、ペダル

の感じも若干違う。

色々な、不安定な要素を持って、より確実にペダルを処理するために、普段から、注意深く「音が出る瞬間」と「ペダルを踏む意識」「ペダルを上げる意識」の三つを、一体化させて、成功の体験を重ねておくことが、大切である。